
「ハエトリグサ」

巡芳もとめ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「ハエトリグサ」

【Nコード】

N9892Y

【作者名】

巡芳もとめ

【あらすじ】

大学で仲良くなった友達。

彼女はハエトリグサをたくさん育てていると言う

。

(前書き)

人間の無意識の罪の意識。

大学に入ってなんとなく仲良くなった友達。

入学早々、授業初日に筆記用具を丸ごと忘れてきた私に、

「書くもの忘れたの……？ 貸そうか？」

と、本当に借りていいのだろうかと思うほど愛想のない、好意的ではないような目を向けてきたその子。

「ありがとう」と借りたシャーペンは、たくさんのドクロが散りばめられた上に血が飛び散ったような赤い跡のある毒々しい模様。

ノートに視線を落としてつつも、横目でそっとその女の子の方を見る。

色白を通り越して人工的なほど人形のように真っ白い肌。すっぴんなのに唇だけ真っ赤。ほとんど白に近い金髪に染められたおかつは頭はすそがスパツと真っ直ぐに切り揃えられている。その上、冷めた表情のその瞳には水色のカラーコンタクト。一重だけど目は大きく切れ長で、ガラス玉のようなその瞳は異様なオーラを放っていた。

昼休み、校舎の外のベンチに座って私は彼女と昼食をとる。

コンビニで買ってきたおにぎりを食べる私と彼女の間の人ひとりの隙間に、彼女は自分の鞆の中身をぶちまけはじめた。

なにやってんだろう。なにか探しているのだろうか。と彼女の方を向いた私の視界には、ベンチからコロコロ転がるたくさんのビーズ。なんだか触ってはいけないような気がして、私は拾うことはせずじっとそれを見つめる。

他にもベンチの上には、黒のiPod。口元と手の爪に血糊がついた黒いクマのヌイグルミ。たくさんの小銭。頭痛薬に睡眠薬。まるでデスノートみたいな真っ黒い無地の表紙のノート。いろんな種類の駄菓子。

「これはなに？」

謎めいた小さな木の箱、それに思わず飛び付いて聞いてしまった私。

「それは、種」

「花かなにかの？」

「ハエトリグサ。家で育ててるの」

ハエトリグサ……無数のキバが生えたような大きな口を開いてハエを食べるあれだね、あの植物のことを言ってるんだよね。あんなもの育ててる人なんて初めて会った。

「ハエトリグサ好きなの？」

「好きっていうか、ハエが多くて困ってるから」

ハエが多いからってハエトリグサを育てようという結論に至る人はまずいないよな。

「殺虫剤とかそういうの使わないの？」

「薬品とかあまり使いたくない。傷むから」

「傷む？ なにが？」

「作品が」

作品？ 家で美術作品でも作っているのだろうか。

私はその時、はっとした。

ハエが多い……作品が傷む……作品……まさか死体とか？

私は自分のおかしな発想に困惑しながらも気持ちを落ち着かせようと話題を変えた。

「そのiPodにはどんな曲が入ってるの？」

彼女はベンチにぶちまけた鞆の中身をまた鞆に戻しながら、

「デスメタル」

と答えた。

「全部？」

「五百曲、全部デスメタル」

私の、死体、という発想はあながち間違っていないのではないかという考えが頭をよぎって、内心びくびくする。

「……さ、作品でなにか作ってるの？」

本題に踏み込む私。

「いろいろとね」

いろいろ？ うまくはぐらかしたのではないか？

「いろいろとって？」

「知りたいの？」

手を止めた彼女は私の目をじっと見た。吸い込まれるような白い肌と水色の瞳。

知りたくないが知りたい。

「ハエがたくさんたかるのよ」

ヒントとも言える彼女のその言葉に私はたじろぐ。

「……死体？……」

思わず聞いてしまった私。

が、彼女はそれを聞いてニヤリとした。あ、初めて笑ったと私は見当違いなことを考える。

「家に見に来てみる？」

ここまでくると、もはや嫌とも言えず、学校帰りに彼女のあとをついていく私。

ずいぶん大学から離れた見知らぬ駅まで来てしまった。

自分もその作品のうちのひとつにされてしまったらどうしよう。

ごく普通の少し古い一軒家、「おじゃましまーす」と小声で呟き靴を脱いで彼女のあとをついていくと、

「あ、靴は持ってきて」

と彼女。

なぜだろう。あつ、そうか。玄関に私の靴があったら、もし誰かが訪ねてきた場合、もし私も作品のうちのひとつと成り果ててしまった場合、私がここに来ていたということがバレてしまうからだ。彼女は廊下の突き当たりのドアを開けた。そこは倉庫かガレージのようなところだった。彼女は自分の手に持っていた靴を地面に置くと、それを履き倉庫の奥へ進んだ。靴って、そういうことか……。しかし怪しい倉庫。

その倉庫の中には、更に小さな四畳ほどのプレハブのような四角い部屋らしきものがあった。そして、そのまわりには大量のハエトリグサが植えられていた。芝生のように敷き詰められている。はっきり言って、気持ち悪い。

「これなに？ 誰か中にいるの？」

私の問いを無視して彼女はその四角い部屋のドアらしきところをノックした。

「おかえり」

中から男の人の声。彼女の背後から部屋の中をそっと覗くと、彼女にそっくりな外見の、真っ白い肌、水色の瞳、金髪の短いサラサラの髪の男の子がいた。しかし、そのフランス人形のような美しい外見とは裏腹に、四畳の部屋の中はいわゆる「ゴミ屋敷」状態だった。ザンパンの匂いがする。

「彼は誰？ 兄弟？」

「ううん。私の彼氏」

えええっと声を上げた私。なぜ彼氏がこんな異常な場所に？

そして、彼女がさきほど言ったことに嘘偽りはなく、本当にハエが異常なほど部屋の中を飛び交っていた。吐き気がする。私の足を飛んでいたハエが、ちょうどハエトリグサに止まると、キバをむき出しにし大口を開けたその植物はバクツとその口を閉じ、いつも簡単にハエを食した。

「なんで彼氏がこんなところにいるの？」

「彼、家族とかいなくて一人ぼっちだから。うちで面倒みてあげてるの。精神不安定だから働くこともできないし、外にも出れないの。怖いんだって」

彼女は、愛おしげに彼の頭を撫でながら言った。

「でもなんでこんな倉庫に？」

「ここが落ち着くって彼が言うから。でもハエがすごいでしょ。だからこうして私はせっせとハエトリグサを植えてるの」

話の順序がおかしい。部屋を片付けてあげればいいことなんじゃ

ないのか、ハエトリグサの前に。

「部屋は掃除してあげないの？」

「彼がやだって言うから」

「なんで？」

「僕はこうしてる方が落ち着くんだよ」

突然、私達の会話に男の子の声が混じったと思ったら、金髪の彼の声だった。

「でも汚いでしょ？」

「これが僕の、そして僕と彼女の作品なんだよ」

「作品？」

どこをどう見たら、どこに作品とやらがあるのだろうか。

彼女は恍惚とした目で彼の頬を撫でている。そして彼もまた麻薬患者のような恍惚とした瞳を彼女にむけ微笑んでいる。二人は完全に二人の世界に入ってしまったている。

「彼が、作品よ」

彼の頬を撫でていた彼女は私の方を振り向くと言った。

そういうことか。彼が作品、か。

「僕は美しくて、汚^{けが}れている。その僕のまわりに積もる汚れたものたち。その汚れに群れる汚れたハエたち。その汚れを食したハエたちを更に食し自らの栄養源とする植物たちの群れ。芸術だろ？」

彼は私に笑いかけて言った。彼の言わんとしてる意味が私には分からない。到底私には理解できない世界にこの二人はいるのだろう。

「親は？」

私は更に疑問を投げかけた。

「お母さんは二階に住んでるの。私達のことは理解してくれているの」

私は、二人の世界にどっぴりな彼等を放置して、そっと二階へと上がった。

そこにはまるで、平和な日曜劇場にでも出てきそうな絵に描いたような、清潔感あふれる優しい雰囲気のエプロン姿の母親がいた。

縫い物をしながら私に微笑む。「あの子のお友達？」私が頷くと、母親も微笑んだ。

私は一人、その家を後にする。

優しそうな陽だまりのような母親。

あの家には二階に天国、下の倉庫には地獄が広がっているような、まるで接点のない空間が共存した世界があった。

けれど、まるで接点がないというのもちよつと違った。

微笑んで正座する母親の足元には睡眠薬が何粒も転がっていた。ガラス棚にも同じ薬のビンが並び、恭しくキリスト像が飾られていた。

あの家庭のことを深く追求すべきなのか迷ったが、たぶん、私の直感でそう感じるのだが、たぶん、あの母親はあの混沌とした世界を自ら望んでいるのだと思う。

きっと何か自分の中の罪の意識を、ああいう環境に自分の身を置くことで、自分を罰しているような気がした。違うように見えて、あの三人の微笑みはどれも同じ違和感を放っていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9892y/>

「ハエトリグサ」

2011年11月29日22時50分発行